

夜半樂

複製

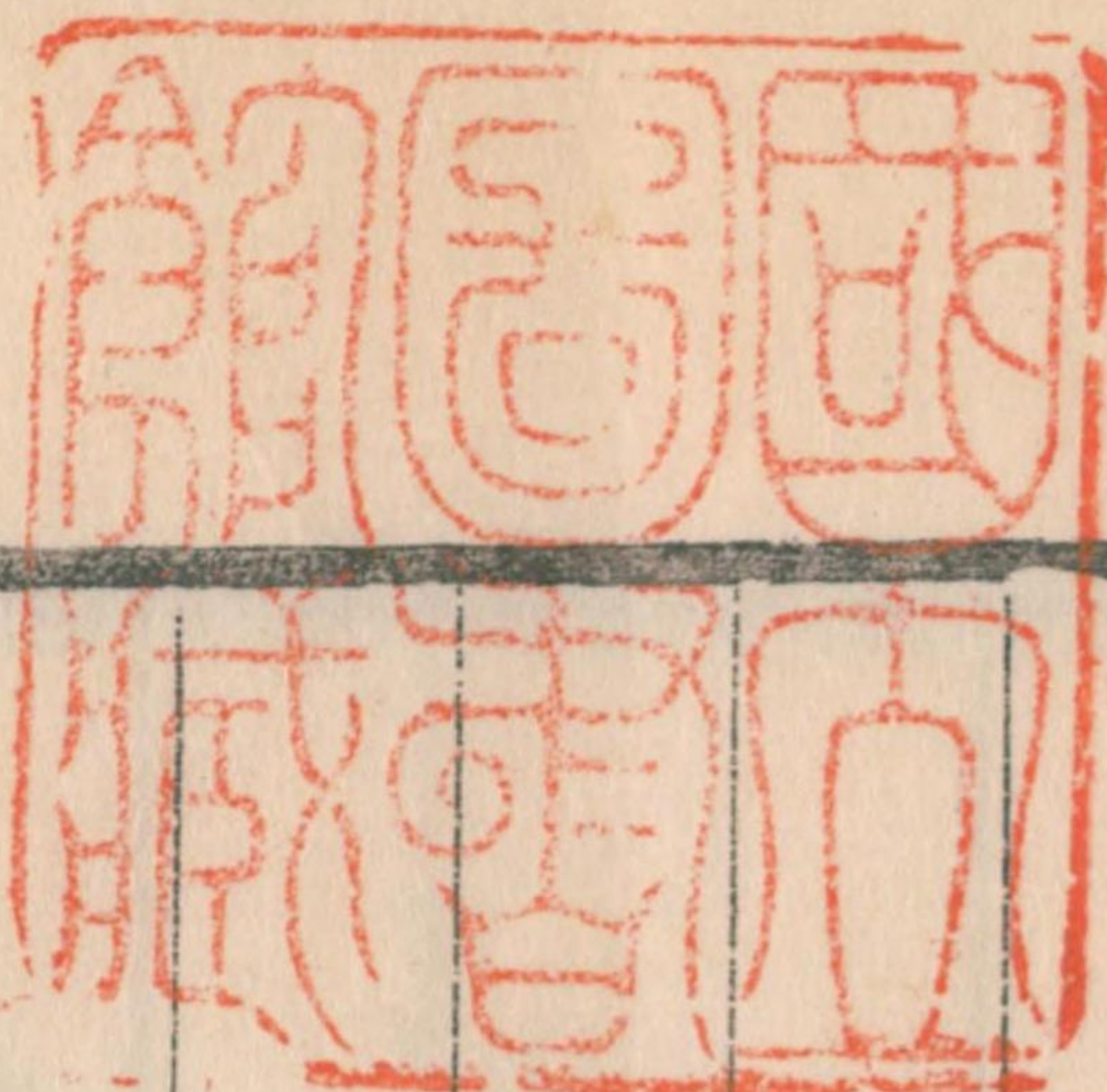
863
110



国立国会図書館 タイトル『夜半樂』 請求記号 863-110

ガラス使用

863-110



目録

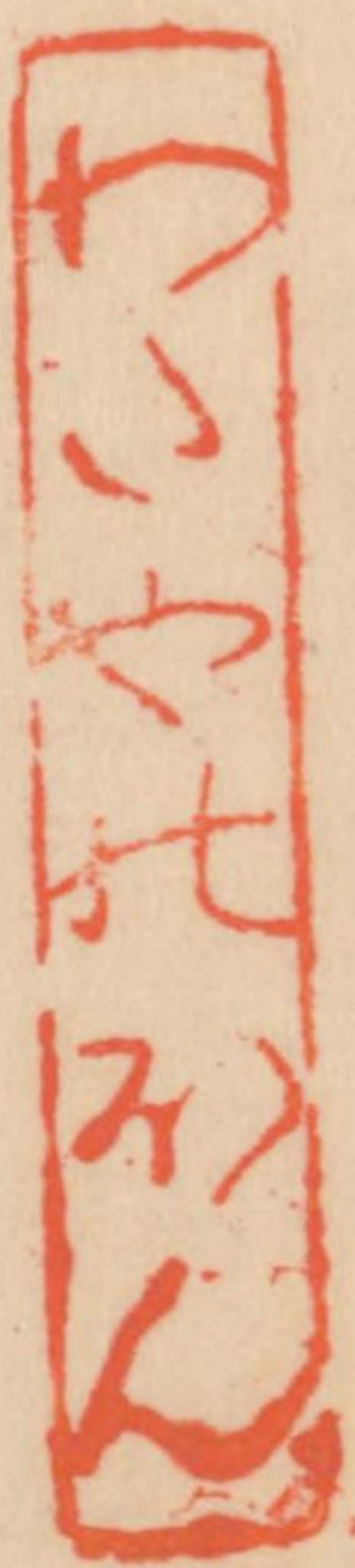
歌仙一卷

春興雜題 四十三首

春風馬堤曲 十八首

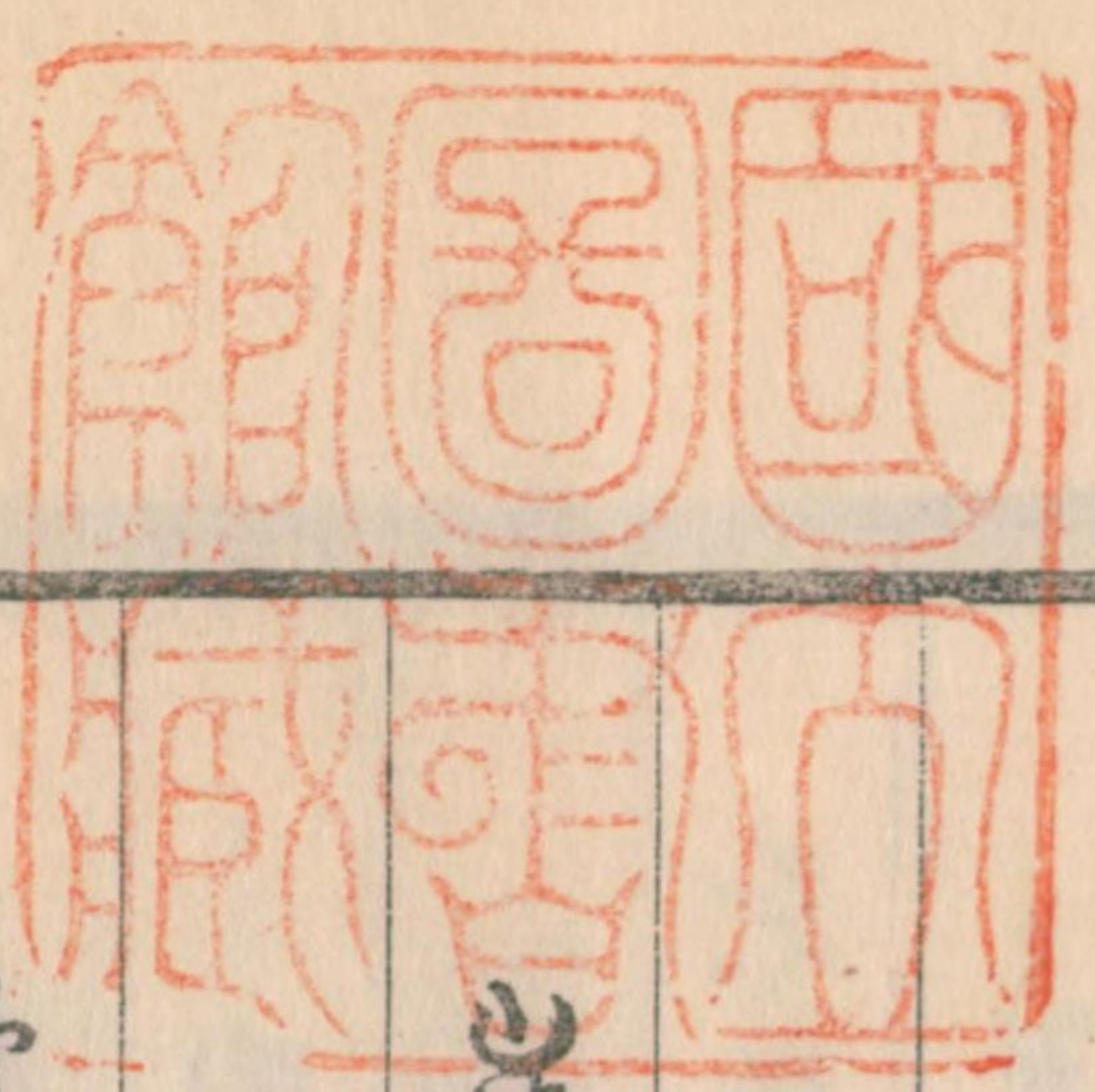
澁河歌 三首

老鸞見 一首



京都守村乃池家に侍りて奉書
平中に草抄自筆に之
と題す

平中



安永丁酉春 初會

菜白をたぐり魚の俳諧の 蘇月

脇に何者節乃飯常 月居

中こいたうちき段みく 月溪

艇万とのくくはくも 自笑

あしこ強き新酒を誂く 百池

十日の月せ出たり 鉄僧

秋風會るるをわしあを

不協秋風音律

蓬門はさむとくハ

可避春興盛滞

されてふの日乃俳諧を

こましく知吾書の人此

口實をなぐとく

纏頭結ふぬまを乃方の白也	田福
廊下乃や草の蓋やまゝのまげし	斗文
目よ知く聖の扉と夜らく	子曳
紀の川上にしらをそ入る	集馬
この世に秋乃を移もるをよき	三貫
門をたたくも隣家の声も	帯川
冬はくぬぐたもともめぬ	致郷
負るは白やよ入	士恭
舌の坊元もあるに音よ白子	道立

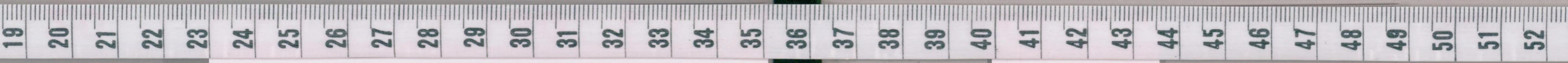
後くらのすろ端ぐまより	晋才
舟的乃夕くれけりて妻の月	正白
三本筆の筆乃定ぬ	舎六
おををのち大破りか坂	我則
浸き葉子かをたのむたる	故郷
夢よと知媽乃老ををけりし	嬰夫
竹をぬくれの行盡よとる	舎員
菊田子不田候や水乃漏出て	菊辛
儒還時よ記す孝子の傳	賀瑞

くそめのいへるそと後二十年 吞柳
はまやれなる園をめぐりて 吞周
餅喫く扱も栖も帰るらく 柳女
錫ともまじりて 銚うも出る 延年
曉乃月うやくとあう陣 維駒
金山ちり記 栗入る白浪 樵風
はくくしとせれとま登の平四郎 東瓦
酒をよ腰を掛川乃宿 左雀
中エさく怒れる蜂乃花去る 乙総

岡初乃畠りまもく花也 霞夫
花のれ三秀院の浪花人 儿董
都をま子住り乃妻 大曾

春興

いふ月をいふは 蛙のむ 白
いふ月をいふは 蛙のむ 白
いふ月をいふは 蛙のむ 白



ゆるあしう一里ををきやうを 田福
病ていん又痛を居るや喜の面 維駒

浪花

墨乃香や此物の奥誰か 霞東
春風や繩を返り傀儡河、志度

あつういやるる彼岸子卯中子 月居
剝松子隣れる柳可南 集馬
雪あるる占其を梅乃花 自笑

里や喜梅入る夕とみちう 士川
夕風や柳々下せ二日月、佳則

敬馬浦

杜木屋の蓮初更に黄をる 斗文
路科 望も忍るちや夕 霞段 菊井
物さくや陶はく故老の業 舎員
青柳やみちあしる望のるい 嬰女夫
白田ある屋しき買たる梅の花 子曳

二日ゆくゆくは今の遠さる 柳女

日ぬ経くや、瘦梅も花咲け 須瑞

一株の梅を植てりて喜と云ふ

いら梅乃白た子春やを付く 鉄僧

深中る梅の月あや竹の周 月溪

蓮初の花もや南の葉も花よ 晋才

たぐも白梅又もくろ香もあす 旧國

寺も梅も起く梅乃白くを 正名

浪花

春雨や隣はくろ乃豆飯 銀獅

遠里に人声ふるもすこころ 延年

但出石

くろと誰く袖リやとろ梅 乙総

くろはや声りのとす古の先、霞夫

水乃る春色ささる夜明る子	香杉
蝶くやお士乃暮きさるる子	香周
乃甲川や夕くさるる所處く	声こ
くくゆや葉目乃傍子さるる常	徳野
道乃やわよく美戸乃回さるる	文皮
こくは昔に枕くさるる和歌さるる	樂園
黄きや樹くも美使さるる常	管鳥
昔乃よ雀乃さるる年乃登川乃	春尔

舟さるるおや乃月や江乃南	九湖
比枝乃く西坂本乃梅の花	龜御
培く樹く乃栗や春は雨	万容
物咲くはちら乃のそくを乃く	白砧
、	
草乃くくく山乃や雉子乃夕	東尾
尾乃乃乃客舎乃	伊丹
茶賣去く酒と美来を梅乃花	百池



黄髮也梅之と訪宿る人 大勇
白梅也吹几馴る朝 嵐 几董

謝蕙軒

余一日問孝老於故國。渡澗水
過馬堤。偶逢女歸省。聊者先
後行數里。相顧語。容姿嬋娟。
癡情可憐。因製歌曲十八首。
代女述意。題曰春風馬堤曲。

春風馬堤曲 十八首

- 入也浪花を出入る長柄川
- 妻也堤長く家遠く
- 堤下、摘芳草 荊与棘寒路
- 荊棘何妬情 裂裙且傷股
- 溪流石點 踏石撮香芍
- 多謝水上石 教儂不沾裙
- 一ち乃茶を世に抄り老ふる孝
- 茶店の老婆の儂を見り態藝ふ

なほ美を留し且儂々春衣を美ふ

○ 店中有二客 能解江南語

酒錢擲三緡 迎我讓榻去

○ 古詩云ある猫見書を呼書來らる

○ 呼雛雛外鶏 雛外草满地

○ 雛飛欲越雛 雛身墮三四

○ 喜妙跡三又中み捷徑あるふと下ふ

○ たく花咲く三こ五こ五こを黄ふ

三こハ白し記得を去年此跡よりと

○ 悔ことる蒲公荳短し〜アヒセリ花を過

○ じう〜アヒセリにたりの喜母る思

慈母る懐袍別子妻あり

○ 春ある成長し〜浪花の阿婆

阿婆白し浪花橋を財主る家

善情をひら〜浪花凡流

○ 柳を辞し才子負く〜三春

本心は〜の末を取橋木の柳

○ 故て春深し行くて又行く

物柳をたてを高くして見る

○ 矯首をみよに見る故園なる黄昏

戸子倚る白髪を才を抱きあは

待春又春

○ 君不見古く太袂を白

髪入る病るやひとくは親の偶

澗河歌 三首

○ 春水浮梅花 南流菟合澗

錦纜君勿解 急瀬舟如電

○ 菟水合澗水 交流如一身

舟中頼同寝 長る浪花人

○ 君と水上る梅の香とくは花水子

浮く去ふと急かし

あゝ江頭入る柳のふれし影毛に

沈し毛をうとくはうらや

老鸞児

○ 春もやあまのこをせとくはうらや

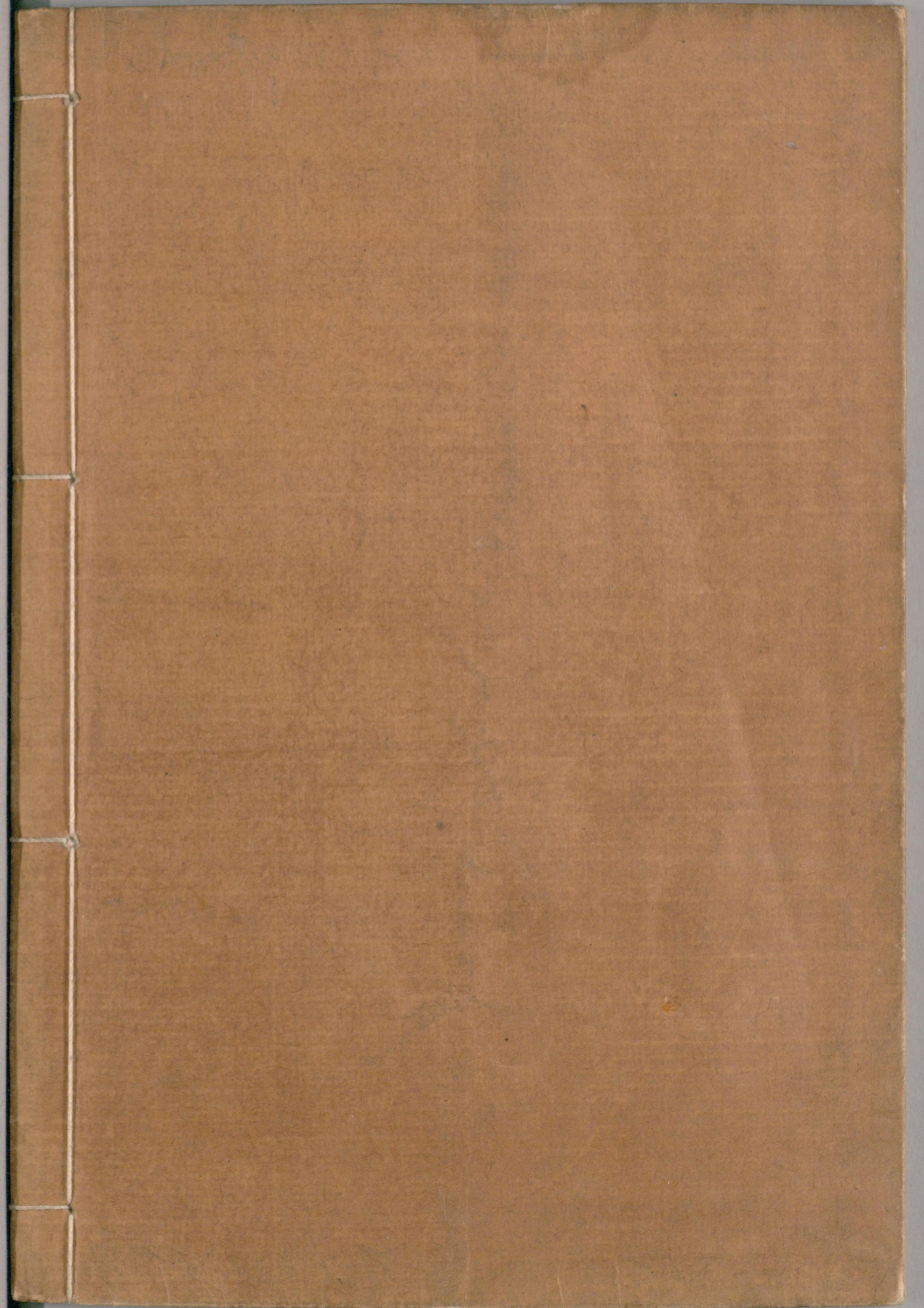
863
110

14216

安永丁酉春正月

門人 宰島校

平安書肆 橘仙堂板



国立国会図書館 タイトル『夜半楽』 請求記号 863-110

ガラス使用